**立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）**
**大学院生研究**
**２００４年度研究成果報告書**

| | | | |
|---|---|---|---|
| **研究科名** | 立教大学大学院　文学　研究科　心理学　専攻 | | |
| **指導教員** | 所属･職名 | 氏　名 | |
| | 文学研究科・心理学専攻・助教授 | 林もも子　印 | |
| **自然・人文の別** | 自然　・　○人文 | **個人・共同の別** | ○個人　・　共同　名 |
| **研究課題** | 小児がんの子どもを抱える家族の心的適応と心理的援助 | | |
| **研究代表者** | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏　名 | |
| | 文学研究科・心理学専攻<br>博士後期課程　１年 | 西　尾　温　文　印 | |
| **研究組織** | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏　名 | |
| | | | |
| **研究期間** | ２００４　年度 | | |
| **研究経費** | ２００　千円 | | |

**研究の概要**（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

小児のがんの子どもを看る保護者の心的状態が時間経過とともにどのように表れるかを調査した。診断後約１年をこれから迎える、実験群である小児のがんの保護者群２４名、統制群である小児疾患の保護者群２７名への質問紙調査を行い、すでに行った診断後と診断から６ヶ月後の回答と比較検討した。比較検討した質問紙は、精神健康調査票、特性不安・状態不安質問紙、コーピング質問紙である。

また、母親へのインタビューを行い、小児のがんの子どもが抱える感情を中心に話を聞いた。

小児専門病院の小児病棟へ定期的に通い、時間経過の中での心理的援助のあり方を検討すると共に、入院している患児の心的状態を描画法で調査した。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔clinical psychology〕〔psycho-oncology〕〔mental-health〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

修士論文研究で行った、我が子が小児のがんと診断された時の保護者の心的状態とストレスコーピングスタイルの質問紙調査を、縦断的研究として、 診断後１年後になる 2004 年 7 月と 2005 年 1 月に行った。心的状態を調査する質問紙は、日本版精神健康調査票(GHQ28)、状態不安－特性不安質問紙（State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ）（STAI-JYZ）を、コーピングを調査する質問紙は、ユトレヒト・コーピングリスト 19（Utrecht Coping List-19）（UCL-19）, 両親のコーピングと健康質問紙（The coping health inventory for parents）（CHIP）を使用した．実験群は小児のがんの保護者群、統制群は生命の脅威とならない小児疾患の保護者群であった。初回の診断時の調査は 2003 年 7 月と 2004 年 1 月に小児専門病院と小児科医院で行った。この際に、縦断研究として診断後 1 年時における研究協力を依頼して同意を得た。小児のがんという病名が保護者に比較的安定しているといわれる特性不安を高めることが診断時には示唆された。1 年後も実験群が、統制群よりも特性不安が高いことが明らかになった。また、コーピングは、人と環境との相互作用の中で選択され、過程とともに変化するという立場からコーピングの変化があるという仮説を検討している所である。

本邦で行われている研究は、インタビューによるものが主であり、またインタビューも家族を対象とするのではなく、両親のみを対象としたり、患児のみ、あるいは兄弟姉妹のみを対象としているものである。本研究の独創的、学術的な点は、小児のがんという病気が与える影響を入院している患児と入院児を看ている保護者の中で検討した点にある。

家族は、一つのシステムであり、それぞれ固有の家族力動が働いているとみなすことができる。家族の成員である子どもが主に幼少期に小児のがんを発病することは、確率的に稀であり、家族にとって衝撃である。

2004年5月から週に1日、小児専門病院血液腫瘍科小児病棟に通い、参与しながらの観察を続けた。主に学齢期以降の入院児とかかわる中で、入院児を看る保護者を含めた信頼関係ができてから、面接調査を始めた。面接内容は、主に入院児の気持ちに焦点を当てた。

また、入院児の気持ちのあり方を調査するために、バウムテスト、自由画、コラージュ、星と波テストの描画法を行った。描画の結果、入院児の不安、抑うつ、母親への依存、怒り等が見られたが、現在も文献を参照しながら、検討中である。

小児のがんをめぐる問題が他の慢性疾患と違う決定的な特徴は、その致命性にある。入院児を看る保護者への面接調査から、我が子が、小児のがんと診断されることは、両親にとって我が子の死を予感させることであり、衝撃であることが本研究から明らかになった。

アメリカを中心とした、サイコ・オンコロジーでは、我が子の死を予感させるという強いストレスから、両親の心的適応とストレス・コーピングとの関係を検討する研究が行われている。また、家族成員が病気になった時にその家族がどのようなリソースを利用できるか否か、社会がどのような援助ができるかというサポートの問題としても論じられている。そして、家族の中でも子どもが病気になることで、家族力動にどういう影響があるのか、また、小児のがんが子どもが幼少・児童期に発病することが多いために兄弟姉妹がmaternal deprivationにおかれるのではないかという家族研究も行われている。さらには、患児や両親が、寛解・治癒後も、再発への恐怖が潜在化・日常化し、そのためｐｔｓｓ（post traumatic stress syndrome）を表すのではないかが研究されている。

当該研究は、入院児を看る保護者の心的状態とコーピングの縦断的研究、入院児の心理学的研究である。

入院児を看る保護者の心的状態とコーピングの縦断的研究からは、診断時から1年経過後も、特性不安の高さが示され、心的状態も苦悩を示すものであった。また、入院児の心理学的研究からは、入院児が適応、順応を余儀なくされる入院生活や治療に対する心的反応の特徴として次のことが示唆された。不安、抑うつ、母親への依存、怒り、強迫性である。表面的には、入院生活の規則を守り、治療に従っている入院児の心理に不安、抑うつ、母親への依存、怒り、強迫性が見られたことは、入院児への心理学的援助の必要性を示唆していると思われる。

研究成果の概要　つづき

※　この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。